

中世曹洞宗切紙の分類試論（十七）

——参話（宗旨・公案・口訣）関係を中心として（中）——

石川力山

四 参話集関係切紙

前稿では、中国宋代以降の叢林において、参禅修行の際に拈提の素材となつた、代表的な公案に関する参話関係の切紙をいくつか紹介した。本稿では、そうした公案参話をいくつかまとめて切紙とし伝えられたものを紹介することにする。

ところで、このような公案拈提が室内参禅の場で行われたことについては、叢林行事関係の切紙を紹介した際に、一夏安居中に扱う公案の目録と、三段階の構成があつたことを述べたが、これらの公案参得の仕方を記録し冊子の形にまとめられたものが門参⁽⁹⁾で、各門派独自の問答応酬や著語の仕方が特徴で、やはり室内秘密伝授物として相承された。それではここに紹介する「参話集」の切紙と門参はどこが相違するかと。いうに、それは第一に、量的なもので、門参資料は殆んどが冊子の形で収録された、公案の数も数十から多い場合は数百

の公案が扱われているのに対し、切紙資料としての参話集は多くても十数話にとどまる。また門参資料が主に寺院単位で相承されるの対し、参話集は切紙相承と同じ形式で伝授されることが識語などにうかがわれる。しかし、各門派毎の独自の参であるという点では共通し、内容的に門参と異なるものではない。これら門参や参話集の成立過程については、もともと個々の公案についての参得の仕方の記録があり、これが集められて参話集となり室内相伝され、あるいは各派独自の門参資料として叢林における公案参究のテキストになつたと考えるのが常識的な見方であろう。しかし、たとえば瑩山紹瑾（一二六四～一三一五）のものとされる十則の公案拈提集『秘密正法眼藏』⁽¹¹⁾や、同師の一六二則の公案注解とされる『報恩錄』二卷、あるいは大智（一二九〇～一三六六）にも『無尽集』『古今全抄』などの公案拈提の抄物があつた。⁽¹²⁾また永平寺の寂円派義雲（一二五三～一三三三）の編になるとい

う伝承を有する『永平寺秘密頂王三昧記』も、漢文体ではあるが五十三則の公案拈提集であり、同じく寂円派の所伝と考えられる、道元が中國留学中に天童山の如淨より传授され、建長五年（一二五三）正月十五日に懷弁に伝えられたという識語

⁽¹³⁾
（十三）

申候、一段与能々座禪メ、工夫肝腎也、可秘々々、
竜天護法善神

慶長七壬寅小春廿四日 文察

東奕尊老江

を有する『南谷老師三十四閻』『三十四話本參』等の書名を有する三十四則の公案拈提集の古い伝本もある。⁽¹⁴⁾ これらがすべて所伝通りに瑩山や大智、あるいは道元所伝のものなどとは考えられないが、かなり古い伝承を有する門參資料であることは間違いない、これらの公案拈提集から任意の公案が取られて、参話関係の切紙が成立したとも考えられる。門參は安居時における日常の修行参禪の際に用いられる古則とその参得の仕方であるが、切紙伝授は室内嗣法相続にも深く関わるものが多く、その意味でも公案の扱い方は限定されてくると思われる。たとえば、永光寺所蔵で慶長七年（一六〇二）文察より東奕へ伝えられた「三十四話」と題される切紙は、

三十四話

師云、枯木竜吟ノ時節ヲ、代、一息截断之處デソウ、師云、マダモ聞エヌゾ、着語ニ云エ、代、出息不_レ涉_レ諸縁、入息不_レ居_レ穏界、師云、真見道ヲ云エ、代、コ々ハタキズテナリ、又一樣、枯木竜吟真見道ヲ、代、拶眼_{タラス}、師云、着語ヲ、代、万般巧妙_{シナギ}、一円空、是者三十四話之首古則、大夏參候エトモ、放シ

というもので、「三十四話」関係の切紙であるが、その第一則だけを別出したもので、特に大事な古則という意味が付与されている。このように、本来門參に掲載されていた古則とその参得の仕方から派生して、単独の切紙になつたという例も恐らく多いものと推測される。門參資料と切紙資料の成立時期については、先の伝承的なものをそのまま認めることは不可能にしても、切紙の現存するものが室町後期を遡るものには皆無で、切紙資料の成立の方を後とするることは動かせないようである。

以上の前提を踏まえて、本稿では、いくつかの公案がまとまった形式でその参得の仕方が示された参話集関係の切紙を紹介するが、まず、中世の門參資料で大きな比重を占める通幻派のものが問題となろう。門參成立の契機となつた夜参の伝統に通幻が深く関わっていることはすでに述べたところで、現存する門參資料でも通幻派所伝のものが圧倒的に多い。参話関係の切紙でも、無極慧徹・月江正文といった小田原最乗寺系の通幻派下了庵慧明系統のものがやはり多く、その中で

もかなり古い伝承を有する、小田原市香林寺所蔵、長享年中（一四八七～八九）、天室正運より大樹乗慶に伝えられた、「安叟派伝授后之参禪」をまず紹介しておく。

安叟派伝授后之参禪也

△唯以一大事因縁故出現於世、代云、仏々祖々ヨリ紹キ來ツタガ、皆ナ虛伝テ走、師云、着語ヲ、代云、元一法無^レ可^レ与^レ人、

△師云、俱低一指ヲ、代云、其レデモ無イゾ是レデモ無イゾ、

師云、其レハ何ントテ、代云、ソウジテ其レデモ走ヌ、師云、何ニ落居シテソウジテ其レデモ無イゾ、代云、元一法無^レ可^レ与^レ人、

△三世諸仏向火焰裡用、代云、二頭——心法底、鳥ガ火燭ヲ点ジテ走、師云、大法輪ヲ点ジ用ヲ、代云、嗣書ヲ取テ懷中ニ収メテ走、

△世尊拈華ヲ、代云、一指ヲ急度立テ、法ノ本法ハ本無法也、無法ノ法モ亦タ如^レ是、師云、迦葉微笑ヲ、代云、三拜ノ皈ル、師云、着語、代云、毘婆^レト^レ仏早留^レ心、直至^レ今不得^レ妙、代云、諸仏大円鑑、内外無^レ瑕翳^レ、血脉ノ二字ヲ、代云、陰ト陽ト^レ走、師云、恁麼ノ時如何、代云、靜陰以^レ躰トシ、動陽ヲ以^レ足^ス、師云、過去七仏ヨリ的々相承シテ古今連綿契証シ用ヲ、代云、於^レ中血脉貫通処、一種葛^(ママ)勝々々纏、師云、伝授道場ヲ、代云、無上大^レ照円明、静寂照、師

云、寂照ヲ、代云、勃陀勃地^レ走、人トハテト云句面也、師合掌ヲアギトノ下タニアテ^レ、軀内ニアル時ノモ用ヲスルナリ、爰ガ血脉ノ根本タゾ、師云、畢竟、代云、内心契証、外、伝^レ袈裟、

了畢也、

長享年中三月吉日

天室正運（花押）

附法

大樹乘慶□

小田原にある最乗寺は、通幻の弟子の了庵慧明（一三三七～一四一一）を開山とし、関東を中心に六千箇寺ともいわれる門葉末寺を擁する、日本曹洞宗の最大門派で、末寺の輪住制によつて本山の護持經營が図られた。安叟派とは、この輪住を支えた了庵派十六門派の中の、春屋宗能（一三八二～一四五六）系の七派の中の安叟宗楞（一三八七～一四八四）を祖とする一派で、切紙所蔵の香林寺はその派下の末寺である。同寺には長享年中の識語を有する切紙が他にもいくつか存するが、現存の切紙資料としては最古層のものに属する。ここにいう「伝授后之参禪」とは、嗣法相続を終えたものが、ある意味では悟後の修行ともいえる参究に資した公案の拈提で、その意味でも門參とは異なる扱いを受けていることが知られ、切紙として伝授される所以がある。

次に、同じく通幻派下了庵派の中で、やはり最大門派を形成した月江正文（一四六二）が、その師無極慧徹（一三五〇～一四三〇）より伝えられたという伝承を有する、能登永光寺所蔵、「月江派参話」を紹介しておく。永光寺は明峰素哲派下の本寺で、ここに峨山系通幻派下の門参資料が伝来しているのは不可解であるが、中世公案禪の実態は、他派の参話も大いに参考にし、自派との明確な区別もめざしたので、そした参考資料であつたものが、そのまま切紙として伝授されたのであろう。

(端裏) 月江派参話

死活当頭一句子、学、一喝放身、師云、恁麼時如何、学、誰有テカ答話セン、師云、其コニ活句ガ在ルゾ、学、此ノサカイガ二度走カ、師云、ソレハ何ントテ、学、時節再ビ難^{アシ}逢、転凡入聖自己、学、一擊忘來絶^{アス}見知、亦、蓦然^{アキラカ}趣破、便知休、師云、恁麼時如何、学、當人難^{アシ}弁、師云、凡ヲ転ジ様ヲ、学、蓦此端的、生死透脱デ走、自己転處、学、一句合頭ノ語、万劫繫駒櫬、師云、ソレワ何ントテ、学、機不^レ離^レ位墮^リ在毒海、是ハ転ズル自己也、点ズルト云テ徐所ニ点ノ更デハ無シ、自己不転、学、不^レ離^レ当處、常湛然、師云、是何物、学、本来面目露堂々、

自己目前兩墀^{ツチ}ノ隔、学、尽不尽ノ隔テ走、自己目前一致、学、藏^シ忌^ム自己身、偏界共影現、師云、自己与^ニ目前ノ差別ヲ、シタ時キデ走、師云、ソコニ着語ヲ、学、唯照^ク壁、有^レ月更学、尽ハ自己不尽ハ目前テ走、

自己真照渾源、学、大風大波ミノトツトシヅマツテシン^シト毫釐功之迷イ、学、自己一色デ走、師云、何ントシタガ自己一色デワ在ルゾ、学、雪覆^シ橋林^ノ同一色、師云、ソコデ迷イ様ヲ、学、地疑^ニ明月夜^カ、山似^ニ白雲朝^カ、

智不到、一句子、師拶云、千仏場ノ境界ヲ捨處カアルゾ、学、ドノ先達モ芦花深処エ越テ千仏場ノ境界ヲカエラレテ走、師云、承当ヲ、学、蛇脱^レ皮竜脱^レ骨、師云、ソコデ一句子ヲ、学、此境界ナル処デ月ヲ見テモアツ、花ヲ見テモアツデ走、師云、ソレハ選仏場ノ喝ニマギル^ハゾ、学、只ダメ月ガ面白イ花ガ面白イト喝シタレドモ、喝ノ用ヲバナシ走ヌ、師云、喝ノ用ヲナサヌ証拠ヲ、学、長安夜々月、

智不到功位迷ヲ、学、雪封々々、雪却迷、月滿々々、月不^レ照、亦、芦花雪月、那時一色還迷、野水秋空、

清白円明智不到、学、樓閣千家月、江湖万里秋、師云、正恁麼時如何、学、田通大虛無欠無余、

時如何、学、田通大虛無欠無余、

智不到転處、学、鶴出^ニ銀簾^{ビリヤン}冲^ニ霄漢^{ビイ}、

智不到不転、学、水天虛碧共秋光、師云、正恁麼時如何、学、

清波不^レ犯、意自異、

智不到不^ト転々、学、宛然自冲^レ天有^レ氣、師云、其コニ当テ着語

ヲ、学、船寄^ニ若花一、吟不^レ眠、不知身有^ニ廣漢宮、

智不到異弁眼コヲ、学、牛羊眼無^ニ方隅、師云、猶^ヲモ子細ニ、

学、井見^ル駒、

功位路玄通^ニ處ヲ、学、借^レ功明^レ位、師云、直^ニ玄路路通様ヲ、

学、雪ハ溪橋^{カタ}断^ル繼^フ、

那邊承當ヲ、学、揭^ケ開^ル金鎖^{カタ}、看^ル裡頭^ハ、陰々タル風光^{元自^ト}、異^ト、

師云、異^ニナルトハナゼ云タゾ、学、ナント轉々シタモ、元

トノ物デ走ウ、

那邊透過ヲ、学、王不^レ存^ニ王位^ハ、師云、ソレワハタカラヌ「タ

ガ、何トシテ透過デワ在ルゾ、学、那邊ヲ透過ノ走、師云、

猶モ子細ニ道將チ來レ、学正坐ノ正ト不^レ樂、

那邊体得這裡行履ヲ、学、成都万更好^シ、不^レ如^ニ我苦飯^ハ、師云、

即今行履底作麼生、学、生不^レ願^ニ生天、死不^レ恐^ニ地獄、

誰勘弁、師拶云、今時ノ人ノ上^ニ勘弁サシ玉^ハ、学、笑入^ニ芳

塵^ハ、爛熳遊^ブ中^ニ勘弁シテ走、師云、何ント見タゾ、学、イ

ヤシイ物ノ様^ハ躰^デジン上ナ人ヲ見テ取テ走、師云、何トテ、

学、混^ハ不^レ交、類^ハ不^レ齊、

那時三主勘弁、学、幻人本来人無位真人ト名ハ喚ビカエタレドモ、主ハ一人デ走、師云、ソレワ何ントテ、学、俗人ノ烏帽^ハ、名官度受領^ハ、勘弁シテ走、師云、何ント見タゾ、学、イ

向勘弁ノ走、師云、畢竟如何、学、名依^ハ喚^ハ、

那時窮極ヲ、学、陰極テ走、師云、子細道将来^ハ、学、威音王未^レ曉、弥勒豈^ハ惺々、

位裡転側、学、佳人睡起髮未^レ梳、亦位裡転側無^ニ識受^ハ、

裡頭却来、学、密移^ニ一步^ハ、六門曉、師云、恁麼時如何、学、

不^レ守^ニ那邊空王殿、

偏正一致、学、黃河從^ニ源頭^ニ濁了^ハ、師云、ソコデ清濁ヲ、入力チ

來^レ、学、當人何弁濁中清、師云、當人ヲ、学、張三李四^ニ走、

目前転側、学、春有^ニ百花、秋有^ニ月、夏有^ニ涼風、冬有^ニ雪、外頭却來、学、今時生^ガ外頭ノ却來デ走^ソ、師云、何人トカ却

來^ス、学、妙田無相却來人、隨^ハ類^ハ權^ハ分百億身、

那邊退得這裡行履、学、到得坂來無^ニ別^ハ、廬山煙雨、浙江潮、

衲僧本分行履、学、ナンニモヲボエ走^ス、

衲僧要活、学、翻^{カエテ}着^ハ襴衫^ハ、歌^ハ雪曲^ハ、倒携^ハ席帽^ハ、赴^ハ二村^ハ、齊^ハ、師云、

何ントテ、学、併ノ境界^ニ走、

衲僧活用、学、別在^ニ那邊不^ト伝旨^ハ、南無皈命仏陀耶、師云、ソ

レワ何ントテ、学、徹底念佛申^ス、境界^ニ佛祖向上^ニ走、

以上六十七位、

無極ヨリ月江ニ流伝

血判在之

ここで取り上げられている課題は、古則話頭という実際的なものではなく、参禅の階梯、公案参得の過程を三段階に指定した、自己・智不到・那邊（初・中・後、一透・二透・三透、最

初・中当・向上とも呼ばれる)の三位を、さらに細分して三十二段とし、各段階をいわば古則に見立てて参究したもので、末尾にある「以上六十七位」とは、師資の問答の数を意味する。この参話も、ある意味では単なる公案参得の仕方ではなく、参得した境界の内容そのものを問題にしたもので、ここに門参資料ではなく切紙として伝えられる理由があつたと思われる。

この三十二段階の参禅階梯の第二十四段階の「位裡転側」だけを別行して、これだけを参話として伝えたものがある。永光寺所蔵で、年代は不明であるが他の切紙に同一の書体のものがあり、天正頃(一五七三~九二)のものと判断される。

(端裏) 位裡転側

位裡転側、不墮功陽之方、不涉色受想行色、示曰、如何是位裡、僧良久云、露柱懷胎、又云、瑠璃殿裏隱寒灯、示曰、如何転側去、更道裡許密契之一句子在、作麼生是露、僧云、裡頭才轉身、塵中未帶名、又云、卓々不倚物、灵々那涉縁、御判云、卓々者、在位一氣生、灵々者未曾來功処、密契ノ處ナリ、故裏頭才轉身不出裏頭、故塵中不帶名、此位一点、三世諸仏歴代祖師全難及難宣時節也、示曰、裡許密契是什麼時節也、僧云、拳極睡、拶云、拳看僧便作睡勢、動キ様在之、師便打席、僧便作驚勢、又極睡、師曰、當著語、僧云、混然無内外、和融上下平、又云、板声驚起夢中人、判云、喻聞物

響、急度為驚、又、不驚何響、不思量而困睡入、此中遍位裡転側、猶是空却已前事也、此的位、云、不墮偏正之方、爰契當之句在、云、佳人睡起懶搔頭、此句意、極睡之少兒被二人喚覺、搔頭又睡入時節、裡許密契云、此当位恐千手大悲提不起矣、□和尚此話、并拈花話參、得畢印可、又法衣混沌未分話畢、相伝云々、可秘々、

御判云、此話者裡許密契之處、千聖又不携、極睡當着聞物響、急度転、而モ未涉思量時節、又位裡眠入處之中看、所以不墮偏正方云是也、是什麼響云、徹處転而後何声知音スル也、先師介禾上代云、眼處聞声、耳處見色、是句位裡転側、此時界、大乘二代禾上、位裡転側、無色受御代云、豆爆星飛、同御判云、転側無色受、言、触頭々物々爆當時節、尽飯自己、後少如此知、爰転側云、當頭者不□、少位裡転側、豆爆者大豆煎、皮爆切時云也、又云、石女夜生兒、同判云、石女無心之全体、夜生兒初生孩兒也、是又無心全邊、雖然生處非転側、ト云ニハ無色受者是也、自拶云、畢竟如何、代、如人在夢欲覺、不覺被二人喚醒云、此句妙也、

右此話、非相続之人謾不可許之矣、通諸家禪錄之公案、秘中之秘密也、

この切紙も、末尾の記載に見られるように嗣法相続を終えた人にだけ披見書写可能とされるものである。「位裡転側」は三位の中の那辺の境涯にすでに到達し、さらに「者裡密

契」のところに深くかない、没蹤跡へと進んで行くところを課題にしたもので、大乗二代すなわち瑩山紹璉の著語も引用されている。

通幻派に次ぐ門派として、峨山紹碩の五哲の一人の太源宗真（一三七一）を祖とする太源派があり、この派にもカナ抄物や門參資料の伝存するものが多い。¹⁶⁾ 次に紹介する、永光寺所蔵、明庵東察より久外嬪良に伝授されたと見られる「梅山和尚門下極位拶」は、太源の弟子梅山聞本（一四一七）系の問答商量の仕方を伝える切紙で、拶は挨拶ともい、相手に対する問い合わせ、時には詰問的な強い意味を含んだ問答應酬を意味する。これは勿論參話集という意味を有する切紙ではないが、明確に門派意識が見られる参の例として掲げておく。内容は「十字」に関するもので、時間空間を貫く象徴的な十の字を宗旨を示す文字として問答体をもつて参究解明しようとしたものである。

（端裏）太源門下極位之拶

梅山和尚門下極位拶、

問云、横三^(ママ)代阿僧祇^{シヨウ}三^{レバ}代阿僧祇^{シヨウ}是甚麼位、答云、一中耳、又拶云、此下便納^{レバ}之、又拶云、当中也、中當也、當破、請試^{シニカサキナフ}當看、此下重拶云、破証拠^{ヤブレル}云、喻^{トエ}此話十字也、堅横兩点^{ハク}十字全^{ハラ}身也、其故^{ハタク}堅窮^{ハヤシ}三際^{ハヤシ}、横亘^{ハツケン}二十方^{ハチガタ}、拶云、猶是未在^{ハタク}、

合時十字也、堅陰^{ハヤシ}橫陽^{ハツヨウ}也、此兩點同時合時、橫點當破故断也、故橫點陽、堅點破也、故本易^{ハシメ}陽高用也、故明不審也、我宗^{ハガ}陰深用故黑也、又云、卦^{ビシカウ}拽陰爻^{ハシカウ}一点也、陽爻^{ハツカウ}二点也、斷也、故立身又手^{ハサウエ}當胸時、又手姿今時、橫姿今時也、堅姿空劫已前也、今時姿白、漫^ミ也、空劫已前姿黑漫^ミ也、立身又手當人、今時空劫已前同時備^{ハシメ}也、此的能看、非^{ハス}陰非^{ハス}陽、非^{ハス}正非^{ハス}偏^{ハシメ}正面去、白漫^ミ時、賓中賓、黑漫^ミ時、主中主也、又塵外^{ハツコ}云夏在、塵劫今時、塵外^{ハツコ}空劫已前也、塵劫賓、塵外^{ハツコ}主也、前^{ハツコ}當的可^レ見、雪豆語引云、空劫已前、徒商量塵劫已後借商量、即今空劫已前、主誰人、當破、是當位指也、前一中耳、當破、是皆十字姿、一中耳也、大極動而生^{ハツ}陽、陽動極而靜、靜而陰^{ハヤシ}、動互為^{ハツ}其根、分^{ハツ}陰陽兩儀^{ハツ}立^{ハツ}之、欲識誕生王子父、鶴冲霄漢、出銀籠、（後欠）

（花押）
（明庵東察）

太源系統の抄物資料としては、最も古いのが大空玄虎（一四二八／一五〇五）の『碧巖錄』の提唱で、通称『碧巖大空抄』と呼ばれるが、この大空開創の三重県広泰寺所蔵の切紙類の中に、やはり參話を集めたものがあり、これは江戸期の明暦二年（一六五六）に養嚴育より寒察に相伝されたもので、太源派としての特色があるか否かは不明であるが、一例として掲げておく。

〔參話集〕

- 露柱一句ヲ、拳、拳頭、堅ツ、師云、其ノ証拠ヲ、代云、徹底無心デ走、師云、露柱拳シツ露柱拳レヨ、代云、拳モ無心、拳レタモ無心デ走、師云、露柱点頭云、三千里外走ツタ機ヲ、代云、無心作用スレバ、作用モ亦タ無心デ走、師云、露柱懷胎ヲ、拳ス、急度良久、師云、昔人相見羊ヲ、代云、虛靈、空妙、師云、虛与_レ靈分_レ羊、代云、露レタワ虚、露レヌハ冥デ走、師云、恁麼時如何、代云、世間空々無、仏性空々心、師云、畢竟如何、拳、厨庫山門、

●大死底、拳、放身、師云、正恁麼時如何、代云、衲僧ノシタワ錯テ走、師曰、非ヲ知ツテ后チ如何、拳ス、払袖去、師云、恁麼時行履處作麼生、代云、没蹤跡處驀藏身、

●万法不侶、師云、不侶底ヲ、拳ス、拶眼、師云、其レハ万法ニ障_タソ、拳、良久、師云、吸尽西湖處ヲ、拳、大口ヲ開テ急度良久、師云、乾シ羊ヲ、拳、喝一喝、師云、一喝ノ人ノ行李ヲ、拳、払袖去、

●香巖樹上、師云、西來意ヲ、拳、良久、師云、樹上頭ハ安ト云機ヲ、代云、口在ツテモ云ハヌハ安ウ走、師云、甚_トテ樹下□難イゾ、代云、口無レバ□ハ又ハ難ウ走、師云、某甲未——給ヘト云ウ機ヲ、代云、昔悟レバ今不_レ迷、大地偏界沒蹤由、師云、正恁麼時如何、代云、元迷悟無_レ可_レ得_レ渠、師云、口ヲ許ゾ一句云ヘ、代云、葉熟枝對ノ走、爰ハ只去ル、師云、去テノ用処ハ、代云、用処無ケレバ只_ダ去テ走、

代云、幻虛空人仏性相、師云、子細セヨ、代云、心喚_シ心難_シ見、全無_ニ皮骨、師云、且目前見難キ處ヲ、代云、毫釐見智ハ走ヌ、師云、見智無キ時キ如何、拳、良久、師云、恁麼時如何、代云、虛空法身々虛空、師云、法身与_ニ虛空_ニ歸訛ヲ、代云、見智起時則虛空見智、起時則法身デ走、師云、見智ヲ起ノトキハ何ント、代云、見智ヲ起サヌトキモ元ト何ンデモ起サヌトキハ何ント、代云、見智ヲ起サヌトキモ元ト何ンデモ走ヌ、師云、見智ヲ走ヌ、師云、何ンデモナイト見切ツタ處ヲ、代云、申走_トトノワ錯テ走、師云、非ヲ知ツテ後チ如何ン、代云、長簾上々展ニ両脚、

●不思善不思惡ヲ、拳、座禪也、師云、恁麼時如何、代、極睡デ走、師云、本来ノ面目ヲ、代云、通身無影像デ走、師云、無影像時如何、代云、渠形走ヌ、師云、渠レハ誰ソ、代云、千仏万祖モ誰ソ_クデ走、

●生下未分ヲ、生下シ用ヲ、拳、合拳、師云、未分ノ分チ用ヲ、代云、耳在不_レ聞、口在テ不_レ云、師云、承当ヲ、代云、駢ガ見_レ井、井ガ見_レ駢、如クデ走、

●竜潭紙燭吹滅ヲ、師云、吹滅下ヲ、拳、喝一喝、師云、急□然孟省ヲ、代云、心空不会デ走、師云、不会ノ性ヲ、拳、兩手ヲ展開_メ云、歷劫長堅、

●船子夾山ヲ、点頭三下——悟ヲ、拳、兩手ヲ展開_メ驚ク勢イヲナス、師云、恁麼時如何、代云、喚シ夢ヲ得ルガ如クデ走、

師云、燒子ヲ挙ノ猶——在リト云機ヲ、代云、死ウ迄デヨ、

●世尊拈華ヲ、師云、拈ノ機ヲ、挙ス、挙ニ座具、薦向拈ノ走、

師云、猶モ子細ニ、代云、此一華ハ億々阿僧祇迄テ開テ走、師云、花ハドコニ開テ走、代云、五百尼伝劫ニ一輪開テ走、師云、如何是此一輪、代云、心大虛ヲ抱テ走、師云、花ノ色ヲ、代云、空色テ走、師云、枝葉ヲ、代云、在リトアラユルガ枝葉テ走、師云、根本ヲ、代云、無モ亦タ無デ走、師云、藥ヲ、代云、実相無相、師云、微笑ヲ、代云、心花開ラケテヨリ微笑ノ走、師云、恁麼時如何、代云、心花發明十方照^(ママ)殺土^(マ)、師云、

說破シ羊ヲ、代云、十方殺土トハ花ナ、照ストハ心デ走、師云、畢竟ヲ、挙ス、即礼三拜
于時明暦二年^{丙申}仲春吉日

前總持保寿住養嚴育(印)(印)

付与寒察九拜

嚴樹上・露柱・釈迦弥勒・瑞巖主人公・頂門眼・劍刃上・法身・飯船・五大老の各話の参を集めたもので、個々の切紙で伝承される例の多い参話が殆んど集められている。切紙特有の参話としては、前稿で紹介した香嚴樹上や趙州狗子の話などがあるが、ここに紹介する切紙にある大死底・頂門眼・劍刃上・飯船・五大老などは特に重要である。

〔参話集〕

一、大死底ノ一句作^マ生、学云、申トシタハ錯テ走、師云、何トテ、学云、元来言ハ走ヌ、師云、死底一句、学良久ス、師云、良久留ハワリイソ、学休ス、師云、正当如何、学云、休処ヲモ休ス、師云、不離生死、学払袖ノ去、

一、臨濟一喝金剛王宝劍、如何是宝劍喝、学一喝ス、師云、正与^マ時如何、学云、百雜碎、當面孤テ走、

一、踞獅子金毛喝、学喝ス、師云、ナン歳ノ金毛ノ獅子ソ、学云、三歳ノ金毛テ走、師云、双牙ヲアラワス時如何、学振舞アリ、

一、探竿影草ノ喝、同喝、師云、何ト探竿シタソ、学云、身ヲ斜地ヲ如何看、

一、不作用ノ喝、同喝、師云、用ヲ不成時如何、学、南ハテ北也、簾風ハ吹当岸ノ柳ヲ、可秘ニ、

次に紹介するのは、永光寺所蔵、天正三年(一五七五)慶松所伝で、富山市自(慈)得寺伝來のものと思われる参話集で、大死底・臨濟四喝・清明・趙州狗子・六祖風動幡動・香

へ、学云々、堂戸深沈トノ、機梭暗動ス、師云、分処ノ初ヲ云ヘ、学云、六窓未明日天照タル一片、師云、六和合ヲ云ヘ、学云、六根六識六境界力和合ノ走、師云、生処ヲ云ヘ、学、生下振舞アリ、終リ始同力別力、学云、同、師云、其証拠ヲ云ヘ、学喝ス、是ハウカノ初声く、及二字く、又云、何ト和合シタソ、学云、真見真聞、口ニハ談論、手ニハ執提シ、足ニハ歩ミト和合シ走、

一、趙州真無不無有無虛無不無狗子ノ一句作麼生、学云、通身忽知無忽知、師云、仏性ヲ云ヘ、学、狗子ノ一声ヲナス、師、ソレハ何トテ、学云、人々具足ノ仏性デ走、

一、六祖風幡、師云、非風不幡、仁者心動リト云タル氣ヲ云ヘ、学云、三界唯一心テ走、師云ク、只一心ノ時如何、学良久ス、師云、ソレハ氣ツマリナソ、学又休ス、師云、自用底ヲ云ヘ、学云、一心カ自由自在テ走、

道テ呵々大笑、師云、上樹一句作麼生、学人纔擬開口、師即閉口、学於有省、師云、拶、云、樹下一句作麼生、学、鷄寒

上樹、鷄寒下水、師云、著句、学、払地煎茶針補衲、師云、学人丁寧説話參底ハ如樹上啣枝、又云、満口含霜、參底ハ樹下人ヘ、寒ニハ重衣、熱ニハ弄扇子、是妙触宣明時節く、

又、樹上ハ空合空正心也、又樹下水投正智也、通々上徹々下、是一般也、師、然則仏見法見一時不立時如何、答、鷄々々入水、師、又拶云、仏見法見不立時ハ趙州為什麼有栢樹子ノ話、答云、趙州無此話、師云、既是諸方道栢樹話有ト、答、

將錯就錯、師又云、若道將錯就錯、你為什麼道無此話、答云、後不可錯、師云、不錯時如何、答云、錯、師又云、豈是不錯乎、答、賊后弓、師云、着句、答云、風定花猶落、鳥鳴山更幽、是ハ樹上々下ノ意也、師、又勘弁云、或鷄寒下ト云閑口ナントスル意旨如何、答云、一同已前機是要也、繼話言不是ヨ、故云、機々相投、心々相知トハ是也、又樹下開口、答、不要言語、只取機而已、所以云、趙州無此話、樹上已前ヲ云ヘ、指露柱、是無相福田也、師云、樹下有人、

一、如何是露柱ノ一句、学拳頭、師云、拳頭ハコシツ、其外何コサシタソ、学、拳頭ヲシク、師云、其外何コサシタソ、学云、天地コサシタテ走、其外何コサシタソ、学云、天ヲコシテ走、師云、拳ツコサシツ、畢竟如何、学極睡、師云、露柱ヲ破裂セヨ看ン、学一喝、師云、破裂ノ昔人逢、如何是昔ノ人、学拶眼ス、師云、何ヲ看タソ、学云、心空ヲ看テ走、師云、其レハ空見タソ、空見ニ落ヌ様ニ云ヘ、

学云、虛ニノ冥、空ニノ妙、師云、虛ト冥トノ諦訛ヲ云ヘ、学云、尽ハ世間空テ走、不尽ガ心空テ走、師云、天ハトコニテ走、学云、天外出頭、看レハ誰カ是我般人、師云、天外到看ン、学拶眼、師云、何ヲ看タソ、学云、一空ヲ看テ走、師云、一空看ン、学云、到ラハ一空テハ走ヌ、師云、何トテ、学云、心ヲ求ツイニ不可得テ走、

一、釈迦弥勒ハ是伊奴、伊是孰ソ、学云、答話有三問處、師云、問答合ツカウ時如何、学抽身ス、師云、何処ニ去タソ、師

云、來無住處、去無方処、

一、主人公喚應喏ヲ云へ、學應諾、師云、透脫生死セヨ看ン、
學云、此身生死ノ沙汰ハ走ヌ、師云、其証拠ヲ云へ、學云、
全心空ミ全ク時生死ノ沙汰ハ走ヌ、

一、頂門ノ眼四天下照破、師云、照破四天下ヲ看ン、學拳頭
上、師云、何ト照破シタソ、學云、尽天尽地本地風光テ走、
一、臨濟一喝賓主ヲ分、學云、午日打三更、師云、臨濟意如
何、學一棒ス、心得有可參、

一、劍上一句作麼生、學放身ス、師云、正當作麼生、學云、片
地是刀鎗、

問西來意、答喪身失命ノ、不答肖所問、弁別セヨ看、學不對力

答話ヨ、寒徹骨滿口氷霜樹下ノ一句莫熟、枝句万里一条鉄、
蚊咬鐵牛、樹上頭安樹下頭難ト云意旨如何、天上天下唯我獨
尊、於愛柏樹子話能々可有單傳、自己分上ト不可看活句也、
是ヲ回宜ノ法門ト云、

一、法身、清淨法身ヲ云へ、答云、赤肉ヲ引散処カ清淨法身テ
走、師云、即法身ヲ云へ、學云、赤肉ヲ引散ノ万物ノ上柳綠
花紅ト顯処、即法身テ走、師云、堅固法身ヲ、學云、春百花
學云、万物上ヲ離タル心ヲモ其眼ヲ此問取收力都盧法身テ
走、又念ヲ能々收力都盧法身テ走、師云、透法身ヲ云へ、學
云、從來不藏一灵力透法身テ走、主賓不對、偏正不對処ヘ、
一、飯船話、示云、一粒米ヲ喫シ一滴ノ水ヲ費ス、我ニ草鞋ヲ

返セ、學云、換骨脫體時、何シノ米錢カ有ン、師云、其施ヲ

ハ誰力受タソ、學云、燒灰成、埋土ト成テ走、又示云、五味

外一句云へ、飯裏皎(ママ)着沙、

一、世尊所說道、一人發真皈源、十方虛空悉皆消殞、

一、天童不然、一人發真皈源、十方虛空氣兒打破飯椀、

一、五祖演云、一人發真皈源、十方虛空築着磕著、

一、仏性參云、一人發真皈源、十方虛空只是虛空、

一、夾山円悟云、一人發真皈源、十方虛空鉢上添花、

一、大仏云、一人發真皈源、十方虛空真帰源、

護法竜天善神、白山妙現大權現、榮巖九拂

天正三天臘月仏成道之日

伝授畢慶松（花押）

常在山慈得禪寺住持比丘

この「參話集」と同筆で、やはり慶松所伝の「通天派七具足古則」も次に掲げておく。この切紙を伝える富山自得寺は、峨山韶碩下の無際純証（一三八一）を勧請開山とする寺で、通天は、無際—瑞雲慧徹—無住妙本—通天隆光と次第する自得寺四世の住持で、永光寺五十一世にも輪住している。したがってこの両切紙は、無際派の參禪の様子を語る極めて珍らしいものであるが、門派独自の商量問答という意識は希薄なようである。

通天派七具足古則

一番、誰話、釈迦弥勒是彼奴彼是誰云機ト乞、学、從來俱住不知名ト云、師云、俱住何トテ不知名テハ有ソ、学云、名付形トラハ伊テワ走マイ、師云、釈迦弥勒ヲ云ヘ、学云、伊生ヨリ釈迦トモ弥勒トモ成テ走、師云、奴子婢子使得処ト乞、学云、行住坐臥、師云、釈迦弥勒名付レハ奴子婢子ヨ、使得タリ、何トテ彼ヲハ名ヲ付ヌソ、名ヲ付ヨ、学云、看時不見暗昏々、師云、如何是畢竟識上不落一句、学抽身而玄三拝、

二番、大死底、々々成來、学云、人死不留放身、師云、着句、

学云、六根不具、七識不全、師云、離四句絕百非ト乞、学云、黒漫々、看時不見暗昏々、師云、活処ト乞、学、起立メ赴勢ヲナス、師云、着語、学云、松風颶々月明々、師云、活中有眼還同死云意旨如何、更不墮思量ト度、師云、死活同意ト乞、学、深休ス、師云、拶云、時人行処吾不行意旨如何、学云、慈悲ノ云ニ時トハ不_レ參此話、已前ノ迷悟ト參得悟道ノ人也、師云、拶云、色身カ廃壞骨頭カ、学少モ不動抬首、師云、放身倒_ニ何処、学云、倒_ニ自己、師云、皈_ニ何処、学云、皈那辺、三拝、

四番、鐘声七条依何向鐘声裏披、鐘ヲカウト撞時何時節、良久、全身袈裟全身虛空、袈裟ヲ云ヘ、学云、霧露雲霞ヨ、師云、懸タル人ヲ云ヘ、学、尽大地尽乾坤、師云、何ト掛タソ、学、柳綠花紅、師云、畢竟ヲ云ヘ、学、天地同根万物一軀、

五番、地獄ヲ云ヘ、学云、娑婆テ走、師云、何トテ娑婆カ地獄テハ有ソ、学云、現六道カテ走、師云、始様ヲ云ヘ、学云、露一滴テ走、師云、終様ヲ云ヘ、学云、死カ畢テ走、師云、畢竟ヲ云ヘ、学云、無始無終々々々、師云、無始無終ナラハナケキワ有マイガ、何トテ嘆ソ、学云、地獄テワ走又カ、師云、其内ヲ出ヨ、学、弘袖去、

六番、虛空五字話、五祖演示衆云、四大海ヲ硯五須弥ヲ筆、虛天脚下挂地、百不知百不会如墻壁似山岳、是此時一心一処坐八万四千却トハ其謂、是ヲ通身眼光不得譬拳頭、師云、如何過、師云、休カ黙カ、学云、不言々々少不動説話ス、頭上挂天脚下挂地、百不知百不会如墻壁似山岳、是此時一心一処坐

下一説話ス、我此性性海硯五須弥ノ筆ヲ染出メ、虛空ノ白紙

是堂中露柱背坐禪、師堂中露柱總不可來參、你不_レ離_ニ堂中

一句道看、（露）柱對面ノ一句ヲ云ヘ、学、師前ヲ道看、向后元來無言、即是露柱對面也、柱說法ヲ云ヘ、学云、語默動靜總是總不是々々不テ處也ト云、是無相ノ田地也、師云、着句、学□□□照、曾テ□鏡□□不登月下機、師云、柱破裂遇

昔人、如何是烈破一句、学倒、師云、遇昔人ト云ヲ云ヘ、有意礼三拝、師云、着句、学云、去來無跡三千界、逆行順行無天側、是轉處時節也、見性也、師云、露柱喫茶飯時如何、学云、喫茶逢飯喫飯、

トハ直ニ紙書、師云、五字是紙コソ、学云、是カ虚空テ走、
師云、証拠ハ、学云、無証拠ハ虚空テ走、師云、着句、学
云、不能天覆天能戴地、師云、你有何處坐臥經行ス、学、從
來過西從西過東模様見ス、師云、有何處去來、学、抽身去、
七番、劍刃上赤脚渡刃時如何、学、放身、師云、乾坤大勘弁ノ
生力死力、学云、劍去久、閃電光、猶是鈍端的難弁、師云、
閃電光ト云意旨如何、学則喝、師云、如何是活人劍、学、直入
拖開着何者喪ス、師云、毒蛇行処草不生、如何是頭々物々
劍、学云、柳綠花紅、師云、我刃ヲ還来見、学、即今大喝
ス、師云、劍ノ上ノ一句、学、師ノワキヘ立依テ、其ノ劍
ハ、師、扇子ヲ指出、當劍一句、学、垂舌睡勢、

「一道」ともあるように、恐らく公案の室内点検を経て与えられたものと思われ、「茂安宗繁信男、年勞久丈室下之□ノ源公案預度、思志深故ニ、此古則ヲ望之間、任望此公案□者也、云云」とあることからも、一種の印可証明的意味をもつて付与されたと見られる。

閃電光ト云意旨如何、学則喝、師云、如何是活人劍、学、直入
拖開着何者喪ス、師云、毒蛇行処草不生、如何是頭々物々
劍、学云、柳綠花紅、師云、我刃ヲ還来見、学、即今大喝
ス、師云、劍ノ上ノ一句、学、師ノワキヘ立依テ、其ノ劍

ハ、師、扇子ヲ指出、當劍一句、学、垂舌睡勢、

宗寿授慶松 九拜

(端裏) 剣刃上本則參禪

劍刃上本則參禪一道

□之九品トテ、淨土ノ教ワ多クトモ、道引玉エ頼ム

処エ、

ここに取り上げられた七則の公案が、なにを基準にしてい
るかは察しがつかないが、大死底・露柱・劍刃上の三則は先の
参話集に共通し、誰話や地獄についても切紙の所伝がある。
これら参話集に収められる古則の切紙は、すでに紹介した
ものもあるが、その代表的なもののいくつかを併せ掲載して
おく。まず、『臨濟錄』を典拠とし、公案参究の到達点を示
す「劍刃上本則(大事)」は、單行の切紙も多く、また図によ
る大事も伝えられている。永光寺所蔵、寛文四年(一六六四)
來安より茂安宗繁信男なるものに付与された「劍刃上本則參
禪」は、在家の居士に与えられた切紙で、「劍刃上本則參禪」

古徳僧問、如何是劍刃上之一句、師云、眉間掛劍、無回互、鮮
血淋濺^ニ梵天、亦問、如何是劍刃上更、答云、身心一如、物
我同躰、心得ワ、劍刃上之一句ト云ワ、敵ト我レト交^ニ鋒先^ニ当
頭ノ一句ヲ一問^ク、徳云、眉間——互ト云ワ、面上ニ一劍ヲカ
ザシテ、薙直キニツ^ト入ツテカラリ^ト切リムスンダル^ト
ヘ、爰ガ劍刃上ニ於テ活得ノ一句^ク、是レ此ノ當頭何ノ地獄天
堂カアラン、サテ少シモ足下背後ニ回互シタラウニワ、立処デ
地獄ニ入ルベキ^ト、鮮血淋濺^ニ梵天^ト云ワ、ツ^ト切タル處
ヨリ血滴ハ上天ニ濺タル^ト、上天ニ濺タル血ト云ワ、清淨ノ
大地獄ニ流レ下テ血ノ池トナルベキゾ、僧亦問、如何是劍刃上
之更トワ、當鋒下ノ一大更ヲ問^ク、一大事ト云ワ、仏モ我レモ

具足スル處ノ這ケノ更ヘ、答處カラリト切りムスブ當頭、身心一如、物我同躰ヘ、爰が這ケノ一大事ノ處ヘ、雖然会得承当シタラバ、切先ガマワルベキヘ、身ト心ト差別ヘ、物ト我レト隔ルベキヘ、眉間ワ齧面ヘ、回互ハカエリタガウテウシロ足シニ退イタル「」、師云、當鋒下ノ一句ヲ云テ見ヨ、代云、本有ヘ田地ニ踏着ノ曾不レ墮ニ古今事ヘ、爰ヲ凡心ヲ点ノ靈人ニ本付テ生死ヲ透脱也、生死ヲ透脱スレバ已前ノ戰場ヲ立チ去テ、無憂平安ニ端右スルヘ、爰ヲ大無憂底ノ行履ト云ヘ、拳處ワ、打頭ノ無弁ノ孩兒ト同境界ヘト云テ、アナガチニカノ児童ノ「ニアラズ、仏祖未生已前ノ心ニ叶ウ処ヲ云ヘ、此ノ肌エニ善惡苦樂ワ無キヘ、我ガ利根智恵ヲ以テ万憂ニカマワルガ我国ノ乱レヘ、世一バ善ト鬪イ惡ト鬪イ苦樂ニ苦シムガ我国ノ乱ヘ、等覺ノ地ヨリ上ニ乱世ノ沙汰ハナキヘ、亦一字巻ノ中ニ、念ヲ切識ヲ切ル一刃ヘアリ、識念善惡生死ヲ切断ノ末堺ヲ劍刃當鋒下ノ一句ト云ヘ、此ノ直下ヲ最初入当初七日一派ヘ、不動同一躰ヘ、此ノ時キ有無生死ヲ離レタゾ、トキニ三世一枚ヘ、師云、句ヲ云エ、

寛文四年中秋彼岸如意吉辰

前總持□□寺現住來安叟付与茂安宗繁信男者也

覺者云、不起一念三世流入、心ワ、纔カモ一念ヲ起コセバ隔ル、畢竟今時下界エホツクト生レ出ルトキ、開イタ眼コモ、互イニ大刀ヲヒシト打チツクル末堺ヘノ眼目モニツナイゾ、亦法花經六卷ニ、父母初生眼悉見三千界ト云モ、爰ノ眼ナ指シノヘ、此ノ時キ可恐地獄モ無ク、貴ムベキ天堂モ無イゾ、何ソノ貪瞋痴ノ三毒が出ツベキゾ、呈ニ爰エ近寄ガアルゾ、ミトリ子ノ意に付ク迄年ヲヘテ仏ニ遠クナルゾ、カナシキ此ノ奇ガ面白

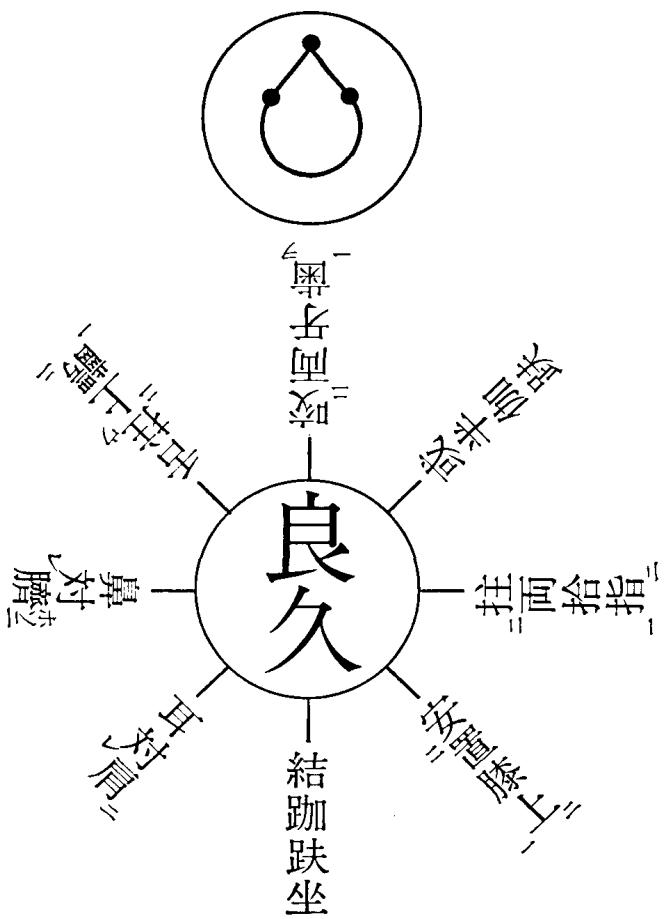
ゾ、ミトリ子ノ眼耳鼻舌身意ノ六相ヲ具足ノ意識ノ出ヌヲ本分ノ如来ト云タ故ニ、武士ワ常ニ劍刃上ノ一句ノ処ヲ拈底^(ママ)ゼズバ、死ノ阿鼻大地獄ニ墮スベキヘ、生死莫大、無常迅速、光陰如箭月似弓、今時日用ワ仮リノ兩マ晴シト思イテ、行住坐臥、二六時中閑ニ光陰ヲ送ル「ナカレ」、惡業惡心我ガコノ旨ノ内ニ地獄モ極楽モアルゾ、遠ク隔テ見ルガ迷イヘ、我ガ此ノ迷イヲ晴サント思バ、一則ノ公案ヲ拈底、朝々暮々此ノ更ヲ念、六字名号称名セヨ、是レニ過タル「ナシ、茂安宗繁信男、年劣久丈室下ノ□ノ源公案預度、思志深故ニ此古則ヲ望之間、任望此公案□者也、後生大事ニ心得エベキ、如此ナレバトテ、心ニ自滿^(ママ)スベカラズ、亦我漫^(ママ)ヲ起スベカラズ、我漫強識ヲ起セバ、諸人誹謗スル者也、諸人誹謗ガ地獄ノモトイヘ、能々心得大事ヘ、

(端裏) 鋏刃上之切低

永平開山道元和尚ヨリ嫡々相承者也

報恩現住長円叟

次に、福井県大野市宝慶寺には、寂円から義雲に授けられ
た旨の識語がある一軸の法語が伝えられており、それは⁽¹⁸⁾



干時寛永十五(戊午)年拾月大吉辰

最乗現住

春沢老衲(花押)

當山開山真筆深不可入他見、
竜天護法善神百拝

寂円和尚附与義雲和尚

というもので、「鋏刃上」とは、それが結跏趺坐の坐禅の当體であったことが領解される。

というもので、これが果して寂円の真筆かどうかは疑わしいもので、漢文体のものであることは珍らしいが、内容は明らか

六祖曰、頂門眼照破四天下、是那箇眼睛、自面前指燈籠露柱
云、擎眼擎這箇聲、曰、眼々相對頂門眼、心々相投已前心、
永平大仏道投機曰、頭對眉兮耳對眉、此眼喚作頂門眼、是即正
法眼也、一切開花老梅樹、是即瞿曇眼睛也、正伝承當此拈頂門
眼睛、百億須弥百億日月、無邊風月唯沙門一眼睛也、去不尽乾
坤燈外燈、

亦寂円云、我祖翁此話投機、我亦二十年前涕淚悲嘆箇話當著、
眼者惣名也、明一事中円真仏性、為也是我豈恰契悟、觸體前本
來靈、照徹毘盧頂顙平、此眼捲開則明々不明、又合則暗々不暗、雖
然又不預開合也、或十八眼或六眼或五門、以作頂門眼更大哉錯
也、雖與麼其亦不捨莫而已、透徹此話即井鑑話、三悟道目前真
大道、正法眼法身呈露、何況其徒亦復開願、非正嫡未曾知之、
若不知之、實者學道未弁為分別、深可秘密、未伝授底人不可授
之者也、

かに「頂門眼切紙」で、道元及び寂円の投機の因縁という位置付けを有していた。「参話集」における参は極めて簡略なもので、他にも図にした「頂門眼切紙」も存するが、いずれも道元や寂円との関係は見出せないので、その意味でも宝慶寺所蔵のものは独自の伝承を有するものと思われる。

次に、「露柱切紙」の例として、愛知県西明寺所蔵、寛永四年（一六二七）諸珍より同寺九世鉄山天牛に付与された「露柱切紙」を掲げておく。

（端裏）露柱切低

吉祥山永平禪寺道元和尚入頭図

過去軀

「露柱當頭」通
「此時有何地獄天堂邪、

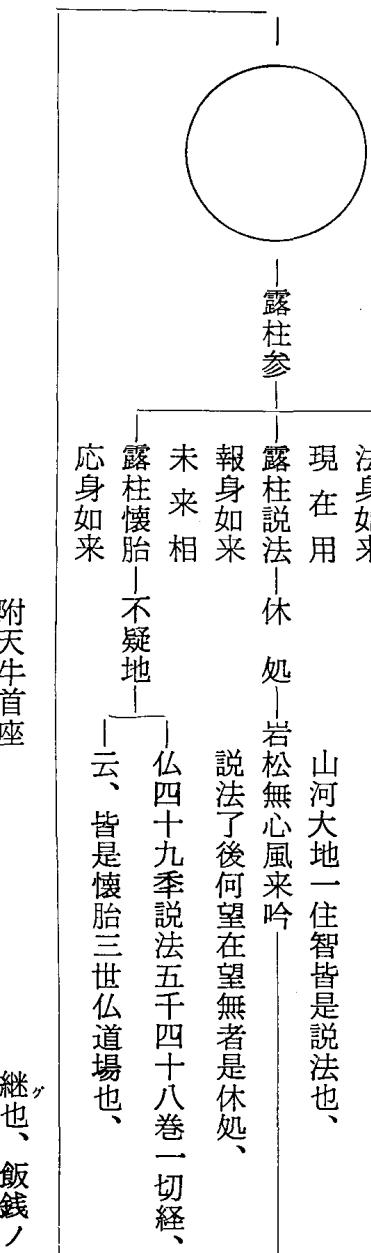
法身如來
現在用

「露柱參」
「露柱說法」休
「報身如來」
山河大地一住智皆是說法也、

「露柱懷胎」不疑地
未來相
應身如來
說法了後何望在望無者是休處、

未 来 相

「云、皆是懷胎三世仏道場也、
「仏四十九季說法五千四十八卷一切經、



千時寛永四年六月念日 諸珍（花押）

附 天牛首座 留

繼也、飯錢ノニツヲ以テ五尺ノ身ヲ立也、地水火風ヲ一散シ
テ、夫々ニ飯シ了レバ、飯錢トモニ飯ヘス、

露柱は叢林寺院の日常に見出せる、ごくありふれた事物

で、これを体・用・相や三身などに見立てて分別したもの

である。

他に、叢林における食輪の問題を扱ったものに「飯船話之切紙」がある。永光寺所蔵、久外嫗良所伝のものは、

（端裏）飯船話之切紙
（端裏）飯船図

師云、飯船之話ヲ、學云、没底籃兒白月盛
帰ル、心ハ、入り入テ底無イ「ヨ、籃兒ニ
飯ヲ打籠ダガ、打マケタト知ヌ、飯モ籃中
打籠ンタト知ヌ時、閻羅老師ノ鐵棒ヲ受ケ
ヌ「ヨ、

といふもので、寺院における金銭や財物を扱う、こいつ、実際生

活面での心構えの問題が、宗旨として定立されたものである。

最後に、永光寺所蔵、自得寺伝來の「参詫集」の末尾に、世尊・天童如淨・五祖法演・佛性参・円(圓)悟克勤、及び大佛(道元)の五師が、「一人発真帰源、十方虚空」の句に語を着けた記録が載っているが、これが「五大老」の切紙で、これを別出し参を加えたものがある。やはり永光所蔵、久外呑(嬪)良の所伝で、

五大老之参

世尊云、一人発真皈^{シス}源、十方虚空皆消胤、私、一人乾坤中只一人也、伴無義也、真根本妙真也、発トハ真妙法露現也、根本發明也、源トハ諸仏頂上、無上本源也、十方天地、四方四維也、虛空大虛也、辺際無義也、真実發明シテ根源至レバ、本發明也、源トハ諸仏頂上、無上本源也、十方天地、四方四維也、虛空大虛也、辺際無義也、真実發明シテ根源至レバ、十方虚空一致ニシテ自目一枚也、悉トハ、発真帰^{シス}源レバ、無量罪惡、住著共ニ悉ク消滅也、胤ハタネト云字也、罪業ノ胤ヲ消也、●師云、一人ヲ、拳、吾具足一心デ候、●真發様、拳ス、吾胸ヲ丁度打云、伊ニ相見デソロ、●源帰様、拳、何モ根本同仏身候、●十方虚空ヲ、拳、十界共ニ少トモ隔ガ候又、●悉皆消胤ヲ、拳、根本清淨ナレバ少モ雜惡ハ候又、●畢竟消胤、拳、湯如^シ水消^シ別有^レ水如^シ無^タ知^シ者上水消^シ畢竟泯処也、

天童覚云、一人発真帰源、十方虚空乞^シ尼飯碗打破、心、隨分ト樂^シ、飯碗ヲホカト打、飯端的ガ真發帰源也、●師云、飯

椀打破ヲ、拳、直入ホカト踏倒放身、●師拶云、其欠椀ヲ捨テヨ、拳、何事デ候、私、一ヶ虛身ヲモ打破スル也、

五祖演云、一人発真帰源、十方虚空、築著磕著、私、築ツツ、磕ハ雷声^{カク}、亦石声訓^{イシノコヘス}、虚空ヒント築著シ、ホカト磕著處ガ真發帰源端的也、●築著磕著處ヲ、師前工直入ハツト云也、●何トテ、拳、時節宣難^{ハツシ}、

私、最初部入当アラズ、何ト無^タ孩兒^{ハツト}云タ如^シ也、

円悟懶云、一人発真帰源、十方虚空、錦上鋪^シ華^ハ、私、仏說錦^シ花トハ、天華乱墜^シ地事也、祖門デハ法輪常転^シ、師學適用地也、●錦上ヲ、拳、我胸ヲ打云、這裡是錦上、●何テ、拳、鋪^シテ候、

私、仏地仏心安^シガ錦上花鋪^シ様也、皈^シ源ヤウ也、心得重々ナルベシ、

仏性参云、一人発真帰^{シス}源、十方虚空、但是十方虚空、私、唯是ト云ガ肝要也、唯是トハ十方虚空本是ト陶タル義也、強真^シヲ發シテ本源ニ能^シ帰依スレバ、虚空唯是本虛空也、●唯是ト云機ヲ、拳、本山元水、私、五大老共本性陶端也、本是眼横鼻直心也、根本能陶^シテ見バ、本是同根性也、無差別而一致也、

自前ミ如此也　　呑良書(花押)

というものがそれで、それぞれの著語に對しての参が付され

る。さらにこの中の「佛性參」だけを別出伝授したものがあり、永光寺所蔵、天正三年（一五七三）十一月八日に、自得寺の宗寿より慶松に伝えられ、さらに慶長五年（一六〇〇）十月二十八日、慶松から東奕へ再び伝授されたもので、次のようなものである。

（端裏）仏性之參

仏性參

師云、來ル物ハ何者ソ、如何々々、道々、学云、何共無物走、
師云、何共無物トハ、何物ソ、学云、只何共無キ元來物走、師
云、一句道々、学云、仏身猶若虛空、應物現形、如水中月底、物
テ走、師云、真証拠道々、学、以手握空中、師云、看々、
学、放開手、師云、何道々、学云、本地風光、本来面目、師
云、如何是面目、学、周遍十方心、不在一切所、又云、十方世
界現全身、師云、一句道去、学、世間空ハ空ニシテ無く、仏性
空ハ空ニシテ真く、師云、有子細転身正法眼ヲ、学云、心火
是也、師云、其上テ向上一路ヲ道、学、一円相ヲ画、有心、師
云、其時過有リヤ否ヤ、学云、魚行水濁、鳥飛毛落、又云、應
學云、打水無跡、一念々々如是、師云、如何是生死ノ二法、
切以々々、諸行無常也、只寂滅為樂マテ走、師云、茶傾三羹、
滴水合成ハ、学云、火裏冰、故冰雪片々時節得、師云、舉送雲
程ハ、学云、虛空界会ハ、

天正三天臘月仏上堂之日 宗寿授慶松九拜
慶長拾五年庚戌十月廿八日 慶松授東奕九拜

以上紹介した切紙は、古則を前提として参話集及びそれに付随する意味を有する切紙で、たとえば「仏性參」と「参話集」の場合は同じ時に伝えられた自得寺所伝の切紙という意味も持っていた。

これに対し、古則とは無関係な事態に対しても、これを同様に問答体で参究を加えている例がある。永光寺所蔵「伝戒三段之古則」は、「不取正戒相」「一得永不失」「血脉不斷」という、受戒の際に唱えられる文言の三句を参究対象に設定し、

〔伝戒三段之古則〕

於能州洞谷山永光寺妙嚴院丈室、伝灯五十四世開山瑩山紹璉書之、

伝戒三段之古則在之、無聽聞曾不可許、

第一、不取正戒相、又無邪念心、是名清淨戒學、学云、拋

座良久、師云、句付、学云、應物現形如水中月、
第二、一得永不失金剛不壞戒、如何是不壞戒、学云、不識、師

云、句付、学云、四大分離法身堅固、

第三、血脉不断戒、何以為驗、学云、行住坐臥、喫茶喫飯、師
云、証拠、学、眨眼、句付、学云、盆中推出夜明珠、

可レ秘々々

という問答でその深意を探ろうとする。これには瑩山書写と
いう伝承も付随しており、受戒の意義も参話商量の形で追求
しようとした例として掲げておく。

注

- (9) (15) 拙稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(五)——叢林行事関係を
中心として(続)」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四十三
号、一九八五年三月) 参照。
- (10) 門参という名称のほかに、秘参・伝参・参禪・参などの言い方
があり、臨済宗では密参録・密参覺帳・行巻などと呼ばれる。
- (11) 拙稿「秘密正法眼藏」について」(『宗学研究』第二十号、一
九七八年三月)、「同再考」(『宗学研究』第二十一号、一九七
九年三月) 参照。
- (12) 「古今全抄」については、拙稿「古今全抄」について」(『印度
学仏教学研究』第二十七卷第二号、一九七九年三月)、「無尽
集」については、安藤嘉則「『無尽集』をめぐる諸問題につ
いて」(『曹洞宗宗学研究所紀要』第三号、一九九〇年三月)
参照。
- (13) 拙稿「義雲編とされる『永平頂王三昧記』について」(『駒沢
大学仏教学部論集』第八号、一九七七年十月)、「『永平寺秘
密頂王三昧記』再考」(『駒沢大学仏教学部論集』第十二号、
一九八一年十月) 参照。これは寂円の公案拈現であるとされ
るが、伝本は通幻寂靈開創の丹波永沢寺旧所伝のものが知ら
れるだけで、通幻派の門参資料の一であると見られる。
- (14) 駒沢大学図書館蔵本中にも、『南谷老師三十四闇』『如元格
外宗』の二種の三十四話関係の門参資料がある。

(15) 金田弘『洞門抄物と国語資料』(一九七六年十一月、桜風社
刊)三三八頁の「曹洞宗関係カナ抄物類別一覧表」参照。
(16) 拙稿『永平寺史』(上巻、一九八二年九月、永平寺藏版)二
七九～二八〇頁の写真掲載参照。